

市川猿之助

市川小太夫

片岡市松

曲直原園筆



豊橋市美術博物館友の会だより

2010年一秋号 Vol. 77

FU風伯HAKU
Autumn 2010

美術博物館の展覧会

—印刷物にみる豊橋の近代— すりものの展「錦絵・引札・包装紙」

開催中～10月3日[日] *9/20[火]は開館



煙草包装紙「国竹 イ印」

刷物(すりもの)とは、辞書をみると「版木を用いて刷ったもの。また、一般に、印刷物」とあります。江戸時代の俳句と絵を組み合わせたものなどを思い浮かべますが、今回の展覧会では印刷物一般をさしています。明治時代から昭和戦前まで豊橋に関する印刷物を5つのテーマに分けて展示します。

1 地図にみる豊橋の近代

歩兵第十八聯隊が測量・印刷したものをはじめ、商店・劇場・観光地の案内や、都市計画を示したものなど、さまざまな

目的で作製された地図を紹介しします。何度も改訂されている地図もあり、町の変化を見比べるもの楽しいでしょう。

2 錦絵にみる豊橋の軍隊

歩兵第十八聯隊・第十五師団を描いた錦絵など。江戸時代から豊橋の町を象徴する吉田橋と吉田城。城址に軍隊が駐屯したことで、描かれる錦絵はどのようにかわったのでしょうか。

3 包装紙にみる豊橋の煙草製造

明治30年代まで豊橋の工業を代表した煙草製造。その中心となった原田万久は、包装紙の意匠にも気を配り、伝統的なものと、西洋風のデザインをうまく使い分けていました。

4 引札にみる豊橋の商工業

商店などが得意先に配布した正月用引札を中心に展示します。恵比寿・大黒といった福神や文明開化を象徴する乗り物などの明るい絵は見ているだけでも楽しいものです。

5 プログラムにみる豊橋の娯楽

無声映画からトーキーに変わる頃、昭和10年前後の映画館のプログラムを紹介しします。毎週映画館で上映する作品の紹介と次週以降の宣伝のために配ったものです。

◎ギャラリートーク 9/25(土)14:00～ (美術博物館 2階展示室) (観覧料が必要です)

愛知県指定天然記念物「葦毛湿原」展 —里山の多様な生物と人間—

10月9日[土]～11月7日[日]

生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の開催にあわせ上記展覧会を開催します。

葦毛湿原は豊橋市東部にある弓張山地の標高60～70mの山麓に広がる湿原で、当地方固有のミカワバイケイソウ・ミカワシオガマ、北方系のイワショウブ・ヌマガヤ、南方系のミミカキグサなど学術的に希少な種が数多く生育しています。また、イヌツゲなどが侵出する遷移をとめて湿原を維持するための植生回復作業も継続して行っています。

本展では、葦毛湿原の特徴や周辺の里山の多様な生物を、植物を中心に写真で紹介するとともに、人間との関係を歴史的な視点から解説しします。特に葦毛湿原とその周辺の自然が里山として利用されてきた歴史を明らかにし、今後の保護活動の参考にするために記録として残すことの重要性を示します。

里山の植物や動物は人間と深い関係にあります。葦毛湿原を中心とした一つの地域の人間と自然の歴史をぜひご覧ください。



葦毛湿原



サギソウ



ミズギボウシ



ミカワバイケイソウ

◎秋の葦毛湿原観察会

10/9(土)9:00～ (葦毛湿原) 申込み:美術博物館(TEL.51-2879)

◎記念講演会

10/10(日)13:30～「葦毛湿原の保護と研究」 中西 正さん、岩瀬直司さん (職員会館5階)

10/23(土)13:30～「葦毛湿原の今と昔」 吉田 豊さん、星野清治さん (美術博物館 講義室)

◎葦毛湿原シンポジウム

10/24(日)13:00～「葦毛湿原の保護と里山の自然」

本間 暁さん、中西 正さん、芹沢俊介さん、植田邦彦さん (駅前文化ホール)

*いずれも参加無料。記念講演会、シンポジウムは申込不要、直接おでかけください。

二川宿本陣資料館の展覧会

館蔵浮世絵展

東海道を描いた浮世絵師

—北斎・広重・豊国・国芳・英泉—

9月11日[土]～10月3日[日] *9/20[月・祝]は開館、9/21[火]は休館

東海道を描いた浮世絵といえば、歌川広重の東海道シリーズが有名ですが、広重よりも早く葛飾北斎は、中判や小判の小さなサイズながら東海道を取り上げており、富嶽三十六景では街道から見える富士を描いています。

広重以降は、三代歌川豊国(国貞)や歌川国芳・淡斎英泉等の絵師が、風景だけでなく美人や役者を配した東海道シリーズを数多く発表しました。さらに幕末には、14代將軍徳川家茂の上洛を契機として、多くの絵師が上洛を題材とした東海道風景を描きました。

この展覧会では、館蔵資料の中から秀作を厳選し、北斎・広重・豊国・国芳・英泉を中心として、多様に描かれた「東海道」の浮世絵を紹介いたします。



「美人東海道 江戸日本橋」淡斎英泉画

海の街道展 —伊勢湾を渡る—

10月9日[土]～11月14日[日]

江戸時代、東三河や遠江の庶民が伊勢参宮をする場合、吉田船町や牟呂、前芝から伊勢湾を横断し、船によって海上を往来しました。これは船参宮といわれ、陸上では名古屋経由で4日間かかる旅程を、天候が良ければわずか半日でたどり着くことができるルートでした。吉田より伊勢をめざした旅人は、帰路には伊勢より名古屋を経て東海道を行く経路をとり、環伊勢湾ルートが頻繁に利用されました。

本展覧会では、伊勢湾を横断する海の街道ならびに、伊勢湾を航行した船や海の文化、旅人の楽しみであった伊勢名物を紹介します。



「三州豊橋関屋街 諸国出船会社引札」

○二川宿本陣資料館講座「伊勢湾に行く」(全2回)

10/23(土)14:00～「近世伊勢湾の海上交通」曲田浩和さん(日本福祉大学教授)

10/30(土)14:00～「近世の船参宮」渡辺和敏さん(愛知大学教授)

定員:50人(先着) 受講料:無料(初回のみ入館料が必要)

申込み:10/3から二川宿本陣資料館(TEL.41-8580)

○伝統芸能 林美也子 「箏・琴コンサート」

10/24(日)13:30～ 林美也子さんによる箏・一絃琴・八雲琴の演奏会を本陣座敷内で開催します。

参加料:無料(入館料が必要)

申込み:当日直接二川宿本陣資料館へお越しください。

二川宿本陣資料館 三世善徳新館長より



本年4月、館長を拝命しました三世善徳(みつよ・よしのり)です。ご挨拶がたいへん遅くなりましたがよろしくお願いたします。平成3年の開館時より長く二川に勤務しておりますが、昭和60年～平成2年までの6年間は美術博物館に勤務しており、発足当初の友の会研修旅行に会員の皆様と出かけたことが懐かしく思い出されます。

二川宿本陣資料館は、江戸時代の交通と地域の歴史文化をテーマとする資料館として、江戸時代の旅や宿場町、歌川広重の浮世絵等の企画展、「ひなまつり」等の行事や伝統芸能、「大名行列」など多様な事業に取り組んでまいりました。

また近年では、池田遙邨・水木しげる・山下清・関野準一郎など東海道を題材とした近現代作家の企画展を開催し展示の幅を広げ、より親しみやすい資料館を目指しております。来年度は開館20周年を迎えますので、記念の年にふさわしい魅力的な企画展等の開催を計画しております。今年度より友の会の皆さんに入館していただける回数が増えましたので、ぜひご来館いただきますようお願い申し上げます。

「美」とは人を感動させるもの

ゲスト：鈴木 敬三さん（画家）

今号から始まる新しい連載のテーマは、「人はなぜ美を求め、美を感じるのか」です。①「一人の画家に聴く～どんな美を求め、どのようにして美を作るのか」②「一枚の絵を人はそれぞれどのように受けとめるのか」③「私を感動させた一枚の絵」④「芸術の見方、聴き方」。以上の内容で4回の連載予定です。財政再建でまず削られるのが文化芸術予算。しかし、人間にとって芸術は本当に不要か否か。美とは何なのか。鈴木敬三さんに、風伯編集部が掘り下げて伺いました。



鈴木敬三さん

石と光がモノトーンで表現された絵画は、一見無機質であるのに、しばらく観ていると温かさが伝わってくる。この絵に込められた想いとは何であろうか。作者である鈴木敬三さんにお話を伺った。

幼い頃から絵が得意で、母親の勧めで前衛日本画家の星野真吾さんに習った。中学生の時すでに、「絵に関係した仕事がしたい」と考えていた彼は大阪芸術大学美術学科に入学した。

日本画を学び始めた1年生の時、作品のモチーフを求めてインドへ2ヶ月の旅に出る。しかしそこで目のあたりにしたのは、イメージしていたような神秘的で美しい街や人々ではなく、貧困と病と死、そして階級差別という極限の現実であり、大きなカルチャーショックを受けた。帰国後2、3年のあいだ絵が描けなくなった。

彼の関心は、世界に渦巻く人間が生み出した惨禍に集中し、カンボジア・ポルポト政権の虐殺事件をはじめ差別問題、貧困、戦争、難民問題などルポタージュの本を読み漁った。3年生の終わりには再度インドを訪れ、苦しんでいる人々が大勢いる現実を、「素直に描いて絵にするしかない。自分がやるべきことだ」と確信した。その想いは150号の卒業制作に結実し、今に続く人間をテーマとした作品の基礎となっている。敬愛する星野真吾さんの、「絵には思想がなければならない」という言葉が若き画家を後押しした。

その後、ロサンゼルスでの妻との二人展で手ごたえを感じながらも、「貧困や差別、戦争体験のない自分は、あとから見たこと、聞いたこと、調べたことでしか描けない」と悩み、原爆を描き続けた丸木位里・俊夫妻の〈原爆の図〉や、新婚旅行で訪れたスペインで観たピカソの〈ゲルニカ〉に、「体

験者の絵にはかなわない。体験した人間の描く絵は違う」と壁を感じた。そして家庭と子どもを持ったことで、敬三さんの視点が変化した。「戦争や貧困は大きなテーマに違いないが、自分のいる小さな世界にもいろいろな問題が存在する。もっと身近なものを題材にしながら、ヒンドゥー寺院の遺跡から得たインスピレーションをもとに、現代社会の遺跡のようなものを描こう」と、人間社会を石のモニュメントで表現する作品を生み出していくこととなる。

墨で描かれた彼の画世界は繊細でありながら力強い。このモノトーンの墨画に移行したきっかけは、友人の死であった。彼の死に直面し、心の痛みと苦しみの中で、「これだけは描かなければ」という切実な想いで筆を運んだ。素早く描くために絵具を溶く必要のない墨を用いて、〈木片男のパフォーマンス〉を一気に仕上げた。重く胸にのしかかるつらさに2ヶ月間支配され、もがき苦しんだ後、一転して美しいものを描きたくなったという。そして生まれたのが、「墨画トリエンナーレ富山2001」で最優秀賞を受賞した〈誘い〉という裸婦である。



「破壊」1981年

特集「人はなぜ美を求め、美を感じるのか」その1



「誘い」2001年

次に敬三さんが注目したのは「石」であった。石は人や社会を表現するモチーフとして最適だった。何年か石を描き続けたのち、新境地を拓くため、歴史を刻んだ巨石を見ようと奈良県明日香村の石舞台古墳を訪ねた。しかし、暑い日差しを浴びながら遺跡をスケッチしていても、期待に反してピンとくるものがなかった。帰りぎわ、石舞台の内部に入って見渡すと、外から差し込む光の神々しさに感動が湧き上がった。「光が人と人の隙間を埋めるものになってくれればすばらしい」と、そののち作品はより象徴的な「石と光のシリーズ」へと昇華する。

敬三さんの絵は蒔絵用の極細筆で描かれている。筆を見せていただくと、あまりの細さに、気の遠くなるような作業量が想像されたが、意外にも彼は「画面を黒く埋める行為は楽しい。ストレス発散になって気持ちよくなしている」という。しかし、「白く残す光の部分を描く時は神経を使うし、勇気がある」とのこと。視力が保てるうちに「密度の高い絵をいっぱい描きたい」と語る。

「絵は展示した時点で自分の手を離れるわけだから、好きなように観てもらえばいいが、できれば何かを感じてもらいたい。もちろん絵に込めた自分の意思や想いがストレートに伝わるのが一番うれしい。今回、自作を説明する機会を与えていただきとても感謝している」という。現在は、「悩んで苦しんで気持ちが揺れ動いている時や、ストレスを溜めた状態のほうが描ける」そうであるが、理想の到達点は、「一本の線、ひとつの点で感動させられるような

絵」を描くこと。将来的には、「表面は単純でも、中身の濃い絵。具象を突きつめて、その先の哲学的で感覚的な抽象をめざしている。そのためには、悟りを開こうとは思わないが、厳しい精神修行が必要だと思う」と語る。

今までどんな絵に感動したかという質問に対して、ピカソの《ゲルニカ》と星野真吾さんが父親を亡くした際に描いた《喪中の作品》の2点を挙げた。さらに、「本を読み、音楽を聴き、美しい自然を眺めたりしながら豊かな感性を育ててこそ、真に感動することができる。絵だけを観ていても感性は養われない。」と付け加えた。人は感動するもの、感動させるものを「美」と呼んでいるのではないかと指摘されたのが印象的だった。



「光の存在」2010年

絵を描くことは、画家の全てを描くこと。しかし、その絵を見るとき私たちは全身全霊で見ているのだろうか。鑑賞者としての精進というのもあるのだと考えさせられた。
(風伯編集部)

鈴木敬三（すずき・けいぞう）

1982年大阪芸術大学美術学科膠彩画ゼミ卒業。2000年「現代・墨への挑戦2000」準大賞。2001年「墨画トリエンナーレ富山」最優秀賞。第59回「パンリアル展」以降毎年出品。2002年「三遠南信アート展」出品（06年・10年も出品）、2007年「東三河の美術～郷土ゆかりの作家たち」出品、2009年「墨の位相-現代水墨画特別展」出品。現在、パンリアル美術協会会員。アートスクール「クレヨン」主宰。

研修旅行報告

松井守男画伯のアトリエを訪ねて 春の長崎研修旅行より



久賀島遠景

長崎港からフェリーを乗り継ぎ、五島列島の久賀島にある廃校(旧 田ノ浦小学校)のアトリエを訪問した。校内に入ると松井画伯の作品群が私たち一行を出迎えてくれた。太陽の射し込む廊下に、この日この時、私たちのために特別に展示していただいたと知り感激一入。廊下の突き当たりの「管理人室」と書かれた三畳ほどの寝室兼衣装部屋までも拝見させてい

ただき、すっかり親しみを感じ、早々に松井ワールドに引き込まれた。広い室内では向かい合わせの壁面をいっぱいに使って、二つの大きな作品を並行して制作中。その部屋での画伯のお話はエネルギーギッシュでしかもサービス精神旺盛。

人間の優しさと残酷



回廊に並べられた作品

さ、そして自然の美しさをテーマに描く画伯は、殉教者にまつわる悲惨な歴史と穏やかな美しい自然が同居する久賀島に心ひかれ、この地を日本での制作拠点に定めたという。本拠地としている地中海のコルシカ島は太陽の光、久賀島は月の光と表現し、一年で一番厳しい季節の11月から2月に久賀島に身を置き、原点に戻った気持ちで制作活動に向かっておられることにも感銘を受けた。



制作中の松井画伯

訪問中に五島市主催の松井守男展が福江文化会館で開催されていた。私たち一行に日程を合わせて作品(ノーモア長崎)の前でのトークショーもあり、地元の方々も多数参加され、熱心な質疑もあった。友の会の宮田会長が、7月17日から豊橋で開催される松井守男回顧展の宣伝をかねた挨拶をされ、花束贈呈というセレモニーも加わり、豊橋市美術博物館をアピールする絶好の機会となった。

今回の旅も友の会ならではの刺激と楽しさに溢れた企画で、遙か五島の地まで来ることができ、豊かな時を会員の皆さんと共有した喜びと感謝の三日間であった。

(220 鈴木冷子)

SPECIAL MUSEUM CONCERT~魂の交流 山下洋輔 MATSUIを弾く

去る7月16日、松井守男さんの古い友人であるジャズピアニスト・山下洋輔さんをお迎えし、展示室にてミュージアム・コンサートを開催しました。

お二人の出会いは松井さんがフランスへ渡る以前にさかのぼります。山下さんは、演奏会のあとフラリと入った画廊で偶然松井さんの絵をみて感激。松井さんを訪ね、すっかり意気投合して交流がはじまったそうです。軽妙なトークとすばらしい演奏を堪能しました。



展示室で演奏する山下さん 撮影：新村猛

イギリス美術館紀行 マンチェスター編

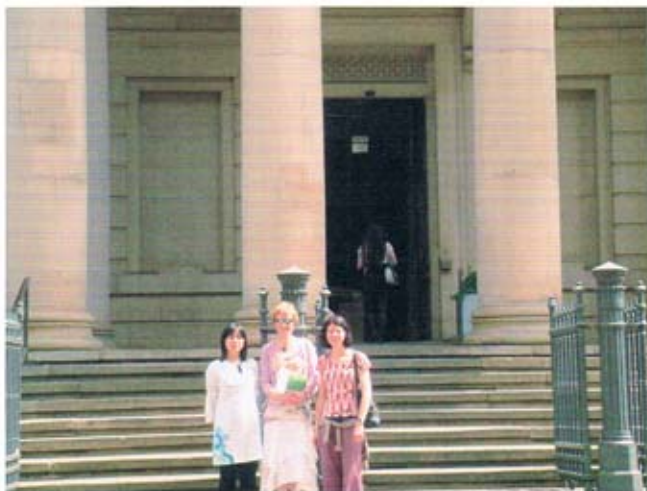
6月18日から28日まで、イギリス・オランダへ行く機会に恵まれた。わずか10日間という短い期間ではあったが、たくさんの美術館を訪問し、予想以上の収穫があった。新たな出会い・懐かしい再会の中から、ある美術館への訪問記を綴ってみたい。

その美術館は、マンチェスター市立美術館。昨夏の「ターナーから印象派へ」展をご記憶でしょうか。この展

覧会に貴重な作品を出品いただいた同美術館を、いつの日か訪れたいと思っていた。様々な幸運が重なり、1年を経ずして同館への訪問が叶い、学芸員との再会を果たすことができた。

マンチェスターとはどんな街だろうか。「産業革命の中心地」、「サッカーチームのマンチェスター・ユナイテッド」（折しもワールドカップ開催中で、マンチェスター到着日には、イギリス勝利の美酒に酔う陽気な人たちが溢れていた）などを思い浮かべる中、上司は「マンチェスター&リヴァプール」を歌って送り出してくれた。

海外からの巡回展は、作品だけがやって来るのではない。展示会の開会と閉会に合わせて来館し、作品の状態を点検し、必要に応じて修復などの処理を施すことも、学芸員の仕事の一つである。またそれは、所蔵者のみが知り得る情報を聞き取ることができる貴重な機会でもある。特にお世話になったのが、アリソン、ジャネット、フィリップの3名で、彼女たちはこのたびの訪問を歓迎し、館内及び市内を案内してくれた。マンチェスター市立美術館は大規模館で、歴史的建造物二棟を改装し、内部で連結した構造となっている。



マンチェスター市立美術館の前で（左端が筆者）

厳重なセキュリティ体制と広々としたオフィスは非常に快適で、働きやすい環境であろう。（学芸員の机上がたくさんの資



右：アリソン 左：フィリップ

料で溢れかえっているのは万国共通のもようである！）同館は、ターナー・カンスタブルらの作品を始め、ヴィクトリア朝美術の収集で名高い。さることながら、それらに加え、現代美術の作品もたくさん展示されていたことが印象的であった。現代美術を集めた展示室では、マンチェスター近郊に在住の日本人作家(Junko Mori)の金工作品を見ることができた。

イギリスの美術館では、コレクション展は無料で見ることができる。代わりに「観覧無料」を維持するための寄付を呼びかける募金箱を設けている。そして、子どもたちへの普及活動に力を入れており、ロンドン市内の美術館でもクラス単位で見学に来ている様子をたびたび見かけた。学期末であるこの時期に学外活動として美術館見学を組み込む学校が多いという。自習用のワークシートや体験コーナー、ワークショップ開催のための「Education Room」など、館の規模を問わず充実した支援ツールを備えているため、きっかけは学校行事としてであっても、その後自主的に美術館へ行く仕組みが整っているのは見事である。



展示室（右端はターナー）

なお、「ターナーから印象派へ」展は、9月26日まで韓国のソウル・アーツ・センターにて開催中である。（ウェブサイト<http://www.sac.or.kr/eng/index.jsp>）(2010/08/17) 私たちを魅了したイギリス美術の秀作が所蔵館に戻るまで、もうしばらくかかりそうだ。

（豊橋市美術博物館学芸員 細田樹里）

収蔵品紹介

引札「豊橋呉服町 伊東屋」 明治25年

引札「豊橋呉服町 清玉堂重太郎」 明治時代

展示会の準備をしていると、「この資料もう少し早く知っていたら出品できたのに…」と悔しい思いをすることがよくあります。今回の「すりもの展」でもそんな資料が出てきました。担当者としては大変恥ずかしいことなのですが、民俗資料収蔵室の未整理資料の中から、民具担当の高橋先生が発見してくれました。出品は間に合いましたが、図録に載せられなくて残念なので、この場をお借りして紹介します。



引札「豊橋呉服町 伊東屋」 明治25年

ひとつは正月用引札です。今でも年末になるとカレンダーを配る習慣がありますが、明治から大正の初め頃に商店などが得意先に配ったものです。描かれるのは、恵比寿・大黒・お多福の面や、俵・小植・小判といったおめでたいもので飾られた床の間。掛けられた軸が略暦になっているところに工夫がみられます。略暦には祝祭日や月の大小、節句や日曜日などが示してあり、家のなかに貼っておくと便利だったのでしょう。

これら正月用引札は、大阪の大手業者が大量に石版印刷したものが多かったと思われる。各商店では見本の中から好きな絵を選んで、余白に取扱商品や店名などを刷り足



引札「豊橋呉服町 清玉堂重太郎」 明治時代

すことによって安価に配ることができました。豊橋の業者によって絵まで刷られたことが明らかなものは少ないのですが、明治20年代にはこの資料のように木版で印刷されたものがみられます。

その頃、豊橋で引札印刷に関わったものに、今風堂矢野佐兵衛・清玉堂加藤重太郎・一進堂田中為吉などがいます。もう一点は、加藤が豊橋で営業を始めることを宣伝する引札です。看板をかたどって「略暦・团扇製造書画摺物処」とあります。商店では夏は团扇を配っていました。また、色紙形と扇子形には屏風紙・封筒・手ぬぐいといった取扱商品が書かれています。年代がわからないのが残念なのですが、口上に「これまでなごや地にて商業いとなみをり候処」とあり、名古屋から豊橋へ移ってきたことがわかる点でも貴重なものです。(豊橋市美術博物館学芸員 増山真一郎)

*上記資料は「すりもの展」にて10/3(日)まで展示

編集後記

鈴木敬三氏のインタビューには25項目ほどの質問を準備して、片っ端から質問と疑問を投げかけました。その問いに、一つずつ丁寧に、真剣に考え込みながら敬三氏は答えて下さった。課題を求めて生きていく中で絵のテーマにめぐり会い、思いを表現していく中でまた次の次元に入っていくプロセスが浮かび上がって来ました。「これからどこまで行くのかな? どこへ行こうと考えているのかな?」それは画家の意識の世界だけでなく、めぐり会う結果の無意識の世界のことなのかもしれない。敬三氏の理想は、「一本の絵、一つの点で感動させられるような絵」。そのとき一つの点で感動する観客として私は存在できるのだろうか。精魂込めて描かれた絵に、私も真摯に向き合いたい。

「なぜ美を求め、なぜ美に感動するのか」私にとっても大事なテーマです。(鈴木伊能勢)

【表紙作品】

錦絵「豊橋弥生座舞台開」明治26年

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第77号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

担当副会長 神野能生子

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 福島陽子 全田順子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成22年8月20日発行(5月・8月・11月・2月各20日発行)

平成10年3月17日 第3種郵便物認可 定価200円

*会員は会費に含まれます。*定価には消費税が含まれます。